ＩＳ－インフィニット・ストラトス－　ＩＦ　落ちこぼれの弟

朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ－インフィニット・ストラトス－　ＩＦ　落ちこぼれの弟

【Ｎコード】

Ｎ０９７６Ｗ

【作者名】

朱雀

【あらすじ】

この小説は一夏に双子の弟が居て、世界最強の千冬と出来の良い一夏を憎み復讐する物語です。駄目文ですがよろしくお願いします。

プロローグ

（ここは……どこだ？）

目が覚めて周りを見るが、ただ真っ暗な闇が広がっていた。遠くからは数名の人間の声が聞こえる。

腕は縄のようなもので拘束されていて身動きができない。隣には俺の兄。織斑一夏が気絶していた。

（どうしてこのようなことに）

俺は思考回路をフル回転させ、今日のことを思い出す。

今日は、俺の姉。織斑千冬が第二回ＩＳ世界大会モンド・グロッソの決勝戦に出場する日だった。そして、俺は何者かに誘拐された。そこまでは思い出した。でも今ここがどこなのかはわからない。たぶん姉は助けに来るだろう。でも……

（俺を助けてくれるだろうか）

俺は一夏より出来が悪い。俗に言う落ちこぼれだ。そんな俺を姉は助け出してくれるだろうか？いや、助けないだろう。そんなことを思っている。確信はない。でも、そう思っている自分がいる。

「……！？」

縄を解こうとしていると、縄が緩み両腕が抜けた。そして、俺が最初に考えたのは、逃げよう。一夏は姉が助ける。どうせ俺は助けない。なら、自分で自分の身を守るだけだ。と思い俺は逃げた。

しかし、それがまずかった。

「おい、ガキが一人逃げたぞ！」
「探せ！一人ぐらい殺してもかまわん」

様子見にきたやつらが、俺がいないことに気がつき、仲間を呼んだ。見つかればすぐ殺される。それはすぐにわかった。だから、俺は見つからないように隠れながら進んだ。

「居たぞ！」
「かまわん。殺せ！」

やつらに見つかり、銃を撃ってきた。打ち出された弾丸は、左腕をかすり、右足をかすった。

「ぐっあ！」

俺は痛みに耐えながら、目の前の部屋に入った。そして、そこには

「I…S……」

そこには一機のＩＳがまるで誰かを待っているかのように、置かれていた。

「……」

女以外動かせないのは知っている。しかしこの時の俺は何かにすがりたかったのだろう。そして俺の手がＩＳに触れた。

「！？」

キンッと金属質の音が頭に響く。
そしてすぐ、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。数秒前まで知りもしなかった『ＩＳ』の基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー制度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、ｅｔｃ……。
わかる。すべてが理解、把握できる。

「行ける……！」

ドンドン！と扉を叩く音が聞こえる。俺は鎌を呼び出し、扉を斬り裂いた。
扉を斬り裂くと同時に、悲鳴が聞こえた。

「ハハハ！ハハハハ！」

見つけたら殺す。そればかりを繰り返し、いつのまにか、誘拐犯は全員死んだ。

「終わりか？」

鎌を引きずりながら、周りを捜索する。この建物内は一夏以外の生体反応がなかった。

「……つまらん」

いつのまにかフォーマットとフィッティングが終了していたＩＳを解除した。

「さっさと逃げ……よ……う（バタッ！）」

体が思うように動かず、意識を失った。

「う、あ……」

目が覚め、周囲を見渡す。

「ここは……俺の部屋？」

本当なのかはわからないが、見覚えのあるものが多くあった。なぜここに居るのかはわからない。それとＩＳに触れてからの記憶が一切ない。

「気がついたか」

と言って部屋に入ってきたのは、俺の姉織斑千冬だった。なぜだ？千冬姉は大会のはずだ。なのになぜここに居る？

「驚いたぞ。突然お前たちが誘拐されたと聞いて、会場を飛び出して、ここまで来た」

助けに来た？いや、助けたかったのは一夏だ。俺はただそこに居たからついでに助けたに違いない。俺を助けるなんてありえない。

「なぜ……なぜ俺を助けた」

「お前と一夏は私の家族だ」

「ふざけるな！何が家族だ！どうせたまたま俺が居たから助けたんだろ！？」
「違う！私は――」
と言いながら、俺の肩に触れた。
「俺に触れるな！！」
と言って俺は千冬姉の手を叩き、俺は家を出て、漆黒の闇が支配する世界に消えていった。

主人公&ヒロイン設定

名前　織斑一春
身長　一夏より少し低い
趣味　読書　料理
好き　本　甘い物
嫌い　一夏　千冬　箒　束
容姿　一夏とそっくりで並んで立つと間違えられるほどだが、今は髪を少し伸ばし束ねている
専用ＩＳ　『ノワール』　『タナトス』
装備品　ピアス　ナイフ　拳銃

一夏の双子の弟で、物心つく前に両親に捨てられ、ずっと姉の千冬と双子の兄の一夏と三人で暮らしていた。そのためか両親のことは顔も覚えておらず、幼少期の記憶そのものもあまりない。千冬が第一回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』で優勝し、兄が優秀なため、周りから過剰な期待を押しつけられ才能がないことがわかると、失望しいつも比べられ、いつのまにか千冬と一夏とはほとんど話さないようになり、中学時代は寮で過ごしていた。
第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』の決勝戦が行われる日に、誘拐され逃げた先にＩＳ『ノワール』が置かれた部屋にたどり着き、触れたらＩＳが動かせるのがわかり、その後誘拐犯を殲滅した。

機体名　『ノワール』

世代　不明
機体イメージ　ウイングガンダム　ゼロ（新機動戦記ガンダムＷ
Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｗａｌｔｚ）
機体カラー　黒
待機状態　黒い羽のピアス

誘拐されたときに手に入れたＩＳで、誰がどのような目的で作ったかは不明。全スペックが現行ＩＳ（紅椿も含む）を上回るが、現在はリミッターをつけてあるが、それでも紅椿と同等。自在に開閉・移動が出来る可動式の主翼二枚は、シールドとしても活用できるほどの強度がある。

バスターライフル×２

二挺装備されており平行連結させる事でツインバスターライフルになり、最大出力でＩＳの絶対防御を貫通するほどの威力を持っている。

デスサイズ

ノワールの近距離格闘装備で、Ｓａｌｖａｔｏｒ　Ｓｙｓｔｅｍを使用することで、刃が三日月になる。

クスィフィアス・レール砲

両サイドスカートに設置されたレール砲。スラスター兼ビームサーベルのラックの役割もはたす。

ビームサーベル×２

ライフルビット×１６

自在に開閉・移動が出来る可動式の主翼２枚の裏に、８機ずつ格納されており、シールドとしての役割も果たす。一春の脳波で操作する。

Ｓａｌｖａｔｏｒ　Ｓｙｓｔｅｍ

特殊なエネルギーを送り武器の強化を行う。
単発式のため、続けて使うには再びエネルギーを送らないと使えない。

単一仕様能力

『？？？？？？』

機体名　『タナトス』
世代　第四世代
機体イメージ　ガンダムデスサイズヘル（新機動戦記ガンダムＷＥｎｄｌｅｓｓ　Ｗａｌｔｚ）
機体カラー　黒
待機状態　黒色のチェーン

篠ノ之束が作ったＩＳで、元もとの名前は『黒式』で一春が名前を変えた。機体は白式と同じはずなのだが、形状が変わっており、エネルギー貯蔵タンクと武装も新たに作り上げられてる。

武装

デスシザーズ

タナトスの近距離格闘型装備。零落白夜使用時は刃が三角形の形をしている。

魔拳銃×２

タナトスが作り上げた射撃装備で、普通のエネルギー弾と零落白夜のエネルギー弾を撃つことができる。

「魂の共鳴」

一春の魂の波長を送りそれをタナトスのコアが増幅して一春に返す動作を繰り返すことによって大技を繰り出すことが出来る。

《死刑執行モード》

二丁拳銃が変化した状態で「デスキャノン」と呼ばれる技を放つ。

《ＤＥＡＴＨ　ＥＡＧＬＥ　４２》（デスイーグルフォーティートゥー）

撃ちだす弾丸を三十八口径から四十二口径に変形させる技。

《親の七光》（ペアレンツ・セブンレイズ）

棺桶を五つ作り出し銃とその棺桶すべてから攻撃する技。

雪片弐型

最初からタナトスに入っていた武装。

単一仕様能力

『零落白夜』

オリジナルヒロイン
名前　亜紀・シューエル
身長　不明
趣味　読書　剣の稽古
好き　本　一春　甘い物
嫌い　怒ったときの一春
容姿　上の上

一春の中学時代のクラスメイトで、ルームメイト。
一春が好き。
よく一春と剣の稽古をしていたため、実力はある。
専用機有り

1話

「全員そろっていますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

黒板の前ににっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。

身長はやや低めで、生徒とほとんど変わらない。しかも服はサイズが合ってないのかだぼってとしていて、ますます本人が小さく見える。またかけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な感じで背伸び感がする。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

けれど教室の中は妙な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちょっとうろたえる副担任がかわいそうだ。

（鬱陶しい）

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員の視線を感じる。

「織斑くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

大声で名前を呼ばれて声が裏返っていた。案の定、くすくすと笑い声が聞こえる。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

副担任の山田真耶先生はぺこぺこと頭を下げていた。この人は年上なんだろうか。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばっと顔を上げ、一夏の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。また注目を浴びるな。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「……」

自己紹介を終わるに終われない一夏。何せ『これで終わりじゃないよね？』的な空気になっている。

一夏は呼吸を一度止め、そして再度息を吸い、思い切って口にした。

「以上です」

がたたっ。思わずずっこける女子が数名いた。

パアンッ！

「いっ――！？」

おそるおそる振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。

「げえっ、関羽！？」

パアンッ！

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

さっきの涙声はどこえやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応えている。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。できない者には出来るまで指導してやる私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんという暴力発言。間違いなくこれは俺と一夏の姉・織斑千冬。

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キャーーーー！　千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」

きゃいきゃいと騒ぐ女子達を、姉はかなりうっとうしそうな顔で見る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これがポーズではなく、本当にうっとうしがっているのが姉だ。

「きゃあああああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」

騒がしいクラスメイトだ。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」
「いや千冬姉、俺は――」
パァンッ！本日三度目。

「織斑先生と呼べ」
「……はい、織斑先生」

――そのやりとりがまずく。一夏と姉が姉弟なのが教室中にバレた。

「え……？　織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ世界で唯一男で『ＩＳ』を扱えるっていうのもそれが関係して……？」

「ああっ、いいなぁっ。代わって欲しいなぁっ」

「織斑弟自己紹介しろ」

「……織斑一春。以上だ。」

危険を察知した俺は、ナイフを出して姉の出席簿を防ぐ。

「お前もお前でしっかり挨拶をしろ」

「あんたには関係ない」

俺は姉の出席簿を受け流し、席に着きそのほかのやつの自己紹介を聞いていた。

全員の自己紹介が終わった辺りでチャイムが鳴った。

「さあ、ＳＨＲは終了だ。諸君らにはこれからＩＳの基本動作を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

こうして俺の高校生活がはじまるのだった。

「……暇だ」

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わって今は休み時間になった。一時間目も授業は睡眠時間を削って勉強したおかげで、理解していた。

「……ちょっといいか」

「え？」

「……」

目の前にいたのは、六年ぶりの再会になる幼なじみの篠ノ之箒だった。

「廊下でいいか？」

「お、おう。一春も行こうぜ」

「勝手に行け」

あいつは一夏に話があるんだ。俺のことは眼中にない。

「早くしろ」

「お、おう」

そして一夏は箒についていった。視線が鬱陶しい。寝よう。

「久しぶり一春」

寝ようとしていた俺にかけたのは一人の美少女だった。

「ああ、久しぶりだな。亜紀。お前も学園に来ていたのか」
「うん。でもニュースを見た時はびっくりしたよ。まさか一春がＩＳを動かすなんて」
「俺もだ」

キーンコーンカーンコーン。

ちょうど二時間目の開始を告げるチャイムが鳴った。

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳを運用した場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。はっきり言って俺はもう教科書の内容を理解していて、暇だ。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

一夏の様子がおかしいことに気づいた山田先生が、訊いてきた。

「あ、えっと……」
「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」
「先生！」

「はい、織斑くん！」
「ほとんど全部わかりません」
……。
「え……ぜ、全部、ですか……？」
山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。
「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」
挙手を促す山田先生。
シーン……。
「……織斑兄、入学前の参考書は呼んだか？」
教室の端で控えていた姉が訊いてきた。
「古い電話帳と間違えて捨てました」
パアンッ！
「必読と書いていてあっただろうが馬鹿者。織斑弟。お前はどうなんだ？」
「寝る時間を削って覚えた」
「そうか。織斑兄。あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ」
「い、いや、一週間であの厚さはちょっと……」
「やれと言っている」
「……はい。やります」

こうして二時間目が終わった。

「ちょっと、よろしくて？」
「へ？」
「……」

二時間目の休み時間。そこに突然声をかけられ、素っ頓狂な声を出す。俺たちに声をかけてきたのは、金髪の地毛で、白人特有の青い瞳がやや吊り上がっている。如何にも『今』の女性の雰囲気だを出している。

今の世の中、ＩＳのせいで女性はかなり優遇されている。その優遇は最早行き過ぎていて、女子＝偉いという構図を当たり前としている女性も珍しくない。

「訊いてます？お返事は？」
「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ」

一夏がそう答えると、目の前の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」
「「……」」

……うざい。
ＩＳを使える。それが国家の軍事力になる。だからＩＳ操縦者は偉い。そしてＩＳを動かせるのは原則女しかいない。つまり『女＝偉い』という世界になっている。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」
「わたくしを知らない？この「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生」あら。そちらはお知りのようで」
「ＳＨＲのとき自己紹介していた」
「一春、質問いいか？」
「なに？」
「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名と、俺がずっこけた。

「一夏……代表候補生は、国家代表ＩＳ操縦者の、候補生として選出される奴らのことだ。単語で想像できるはずだろ」
「そういわれればそうだ」
「そう！エリートなのですわ！」

びしっと一夏に向けて人差し指が、鼻に当たりそうなくらい近かった。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」
「そうか。それはラッキーだ」
「馬鹿にしてますの？」

お前が幸運だって言ったんだろうが。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。たった二人だけ男の操縦者と聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、とんだ期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだか」

「ふん。まぁでも？私は優秀ですからあなた達のような人間にも優しくしてあげますわよ」

これが優しさというものなのか？初めて知った。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？ＩＳを動かして闘うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

一夏が言ったことは相当ショックだったのか、目を驚きに見開いている。

「わ、私だけだと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。氷にヒビが走ってような音が聞こえた。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」
「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」
「うん、まあ。たぶん」
「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」
「落ち着け」
「こ、これが落ち着いていられ――」

キーンコーンカーンコーン。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

とりあえず。『二度と来るな』と心の中で言った。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく姉が教壇に立っている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように姉が言う。説明によると対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席をしなければならない。しかも一度決まると一年間変更はないらしい。

「はいっ。織斑君を推薦します！」
「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」
「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」
「なら俺は一春を推薦する！！」
「ちっ」
「待ってください！納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、オルコットだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……うざい。殺したい。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

イギリスも島国だろ。日本とさほど大差はないだろ。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないなこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

馬鹿だ。

「なっ……！？」

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑一夏と織斑一春とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

巻き込まれた。手を抜いて即行で負けよう。

2話（前書き）

アンケートを取りたいと思います。詳細は後書きを見てください。
ご協力お願いいたします。

2話

「うう……」

放課後、俺の兄・織斑一夏は机の上でぐったりとうなだれていた。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしんだ……？」

ちなみに放課後とはいえ休み時間も変わらず。また女子が他学年・他クラスから押しかけ、きゃいきゃいと小声で話し合っている。

（……うざい）

昼休みも、俺たちが学食に移動するとゾロゾロと全員がついてくる。

「ああ、織斑兄弟。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

呼ばれて顔を上げると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決りました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

ここＩＳ学園は全寮制で、将来有望なＩＳ操縦者たちを保護する目的もある。

「俺たちの部屋、決まってないんじゃなかったですか？前に聞いた

話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」
「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。二人はそのあたりのことって政府から聞いてます？」

最後は俺たちだけ聞こえるように耳打ちしてきた。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入るのを優先したみたいです。二人は一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらく相部屋で我慢してください」
「部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」
「あ、いえ、荷物なら――」
「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」
「ど、どうもありがとうございます……」
「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

大雑把だ。別にそれだけあれば生活に支障はない。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、二人は今のところ使えません」
「え、なんでですか？」

……馬鹿だ。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」
「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」
「い、いや、入りたくないです」
普通に考えてダメだろ。
「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」
ダメだ。この学園には馬鹿しかいないのだろうか？
「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。二人ともちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」
「ふー……」
姉と山田先生が教室から出て行くのを見送って、ため息混じりに立ち上がる一夏をほって行き、俺は寮に向かった。

「ここか」
今俺は割り振られた部屋の前にいる。１０２４室で一夏の隣だった。
鍵開けようとしたが開いていた。
部屋に入ると、大きめのベッドが二つ並んでいる。

荷物を床にやり、ベッドに腰を掛けた。

「誰かいるんですか？」

突然、奥の方から声が聞こえた。ドア越しなのか、声に独特の曇りがある。

「ああ、同室になった人ね。これから一年よろしく。私は――」

「――亜紀」

シャワー室から出てきたのは、今日再開した友人だった。

「さっさと服を着ろ」

「う、うん」

俺は亜紀に背を向け、着替え終わるのを待っていた。

「終わったよ」

「ああ」

「部屋、同じなんだね」

「そうらしいな」

知らない奴と同室になるよりよかったと言ったほうがいいのだろうか？

「もう寝る。疲れた」

「うん、おやすみ」

そして俺は眠った。疲れたせいですぐに眠れた。

2話（後書き）

アンケートですが、ヒロインについてです。

1．一夏ハーレムから二人ほど入れる。（誰を入れるかは、作者が決めます）

2．オリヒロインだけにする。

の二つです。締め切りは8月29日の午前0時までとします。ご協力お願いいたします。

3話

「なあ……」
「……」
「なあって、いつまで怒ってるんだよ」
「……怒ってなどいない」
「顔が不機嫌そうじゃん」
「生まれつきだ」

ちなみに今は入学式当日の朝八時。一年生寮の食堂。
そこに俺と亜紀と一夏と箒の三人が同じテーブルで朝食を取っている。一人で食べようとしていたら亜紀が来て、一夏が別の席が空いているのにわざわざ俺の隣に来た。正直言ってうざい。それに一夏と箒の会話がまともに成立していない。

「箒、これうまいな」
「……」

無視されている。

「ねえねえ、彼らが噂の男子だって〜」
「なんでも千冬お姉さまの弟らしいわよ」
「えー、姉弟揃ってＩＳ操縦者かぁ。やっぱりあの二人も強いのかな？」

そして今日も変わらず、周りでは女子が一定距離を保ちこっちを見ている。これもこれでうざい。

「だから箒――」

「な、名前で呼ぶなっ」
「……篠ノ乃さん」
「……」

名前で呼ぶなと言われて名字で呼んだら、今度はむすっとしてしまった。まだ名字嫌い直ってなようだ。

「一春、ちゃんと食べないと持たないぞ」
「関係ないだろ」

一夏のメニューは和食セット。ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁。ついでに浅漬け。俺は紅茶にパンが二枚だ。

「……織斑、私は先に行くぞ」
「おう」
「……」

さっさと食事を済ませた箒は席を立っていってしまう。

「一春と織斑くんって、篠ノ乃さんと仲がいいの？」
「ああ、まあ、幼なじみだし」

と、一夏が言うと周囲は大いにどよめいた。誰かの『え！？』と言う声が聞こえろほどに。

「……」

俺はお皿を片付け、さっさと教室に向かった。

三時間目が終了して一夏の様子を見てみたが、辛うじてついてきているような状態だった。

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの！？」

「え。案外だらしな――」

パアンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

ちょうどいいタイミングで姉が来た。

「織斑兄弟、お前たちのＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「？？？」

一夏がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ～いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ」

まったく意味がわかりませんって顔をしている一夏が見るに堪えかねた感じで姉がため息混じりにつぶやく。

「織斑弟。教科書六ページ。音読しろ」

「はい。『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術た一切開示されていません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、そのすべてのコアは篠ノ乃博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外コアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』」

「つまりそういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的に専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

本当に理解できているのか、不安だ。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

個人情報バラしていいのか。

「えええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が三人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ＩＳの操縦教えてよっ」

授業中なのに、箒の元にわらわらと女子が集まる。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。教室中の女子が何が起こったのかわからない様子だった。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、箒は窓の方に顔を向けてしまう。女子は盛り上がったところに冷水を浴びせられた気分のようで、それぞれ困惑や不快を顔にして席に戻った。

「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も箒が気になる様子だったが、そこはプロの教師。ちゃんと授業をはじめた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

また来たか。

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんものね」

「？なんで？」

「あら、ご存知ないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思っただけだけど。どうすげーのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう！？」

ババン！両手で机を叩いた。……うるさい。こいつといると面倒だから俺は学食に行った。

「……なぜこうなった」

時間は放課後、場所は無人の剣道場。

「腕がなまってないか見るため」

「わかった」

お互い制服で（着替えるのが面倒だったから）木刀を構える。

「行くよ」
「ああ」

お互いが動き出す。
それはほんの一瞬だった。

「さすがだね」
「そうか？」

亜紀の手には木刀はなく、俺の木刀は折れていた。

「戻るぞ」
「うん」

折れた木刀を片付けて俺と亜紀は部屋に戻った。

4話

翌週、月曜。オルコットとの対決の日。
この前の日に、くじ引きで一試合目は一夏対オルコット。二試合目は俺対オルコット。三試合目は俺対一夏という組み合わせになった。勝利数が一番多い者がクラス代表になることになった。そして俺は部屋にいる。

――♪♪

「はい……」

「私だ。時間だ。すぐに第三アリーナ・Aピットに来い」

「……了解」

俺は第三アリーナに向かった。俺の予測では一夏の負けだろう。

一試合目の結果は俺の予測どおり、一夏の負けだった。そして俺の目の前には『黒』が、いた。

「これが」

「そうだ。お前の専用ＩＳ『黒ｓ』「タナトスだ」なに」

「こいつの名はタナトスだ」

「そうか。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。わかったな」

せかされて、俺はタナトスを装着した。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一春、気分は悪くないか？」

「問題ない」

「そうか」

「一春。頑張ってね」

「ああ」

俺はピット・ゲートに進む。そして始まる。俺の戦いが。

「来ましたわね」

「ああ」

――敵機を感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――。

中距離射撃型か。近距離格闘装備しかない俺は不利か。すでに試合開始の鐘は鳴っている。相手の初撃をかわし、一気に距離を詰めるしかないな。

「それでは、行きましてよ」

キュインッ！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光をかわし、近接ブレード《名称未設定》を展開して、一気に距離を詰める。

「踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

弾雨のごとき攻撃を俺は、かわすか近接ブレードで防ぎ、距離を縮めていく。

「なかなかやりますわね。ブルー・ティアーズ！」

ブルー・ティアーズから四機のビットが射出されオールレンジ攻撃を行う。

（ちっ、タナトスの反応に俺が追いつけてねえ）

じわりじわりとシールドエネルギーが削られて行く。

「そこですわ！」

「ちっ」

レーザーが左肩に直撃。そのまま壁に衝突する。

「ぐあっ」

ライフルの銃口がこっちに向ける。一か八か――

「ぜらあああっ！！」

無理矢理の加速で、オルコットに接近して斬りかかる。

「くっ」

オルコットは距離を取り、空いた左手を横に振る。すると、それまで待機していたビットが俺に向かって飛んできた。

レーザーを避け、ビットをたたき斬る。

軌道は読めた。ビットは残り三機。一気に破壊する。

「そこ！」

かがんで、レーザーを避けてビットを斬る。残り二機。

「これで！」

刀を振り下ろし三機目を破壊。そのまま刀を投げて、四機目を貫き、落ちてきた刀をキャッチして接近する。

「――かかりましたわ」

ヴンッ――。

オルコットの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく、ブルー・ティアーズは六機あってよ」

五機目と六機目のビットからミサイルが発射された。

「くそっ」

ドカァァァンッ！！

爆発と光に俺は包まれた。

◆

「一春っ……！」

モニターを見つめていた亜紀は、思わず声を上げた。

千冬と真耶も爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な面持ちで注視する。

「――ふん」

黒煙が晴れたとき、千冬は鼻を鳴らした。けれど、どこかその顔には安堵の色がある。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

まだかすかに漂っていた煙が弾けるように吹き飛ばされる。

そしてその中心には、あの漆黒の機体があった。

そう、真の姿で――。

◆

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください――

意識に直接データが送られてくる。

「……」

改めて機体を見ると、最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などころか死神を思わせるデザインと変わっている。

そして何より変わったのは、装備の一覧だった。

――《デスシザース》、《魔拳銃》、《雪片弐型》、使用可能――

俺は雪片弐型を収納して、魔拳銃二丁を展開する。

わかる。この武装の使い方が。

「魂の共鳴！」

――《死刑執行モード》――

タナトスから青い稲妻が走り、二丁拳銃が変化する。

「デスキャノン」

引き金を引き三十八口径の銃口から、ビームが放たれる。

「くっ」

ギリギリで避けられた。でもそこに隙ができた。

「逃がさない」

ほんの一瞬の隙をついて、接近。零距離で魔拳銃を乱射する。

『試合終了。勝者――織斑一春』

やってしまった。負けるつもりだったのに。

「よくやった。しばらく休憩を挟む。体を休めておけ」

「はい」

疲れた。更衣室で寝よう。

「……」
「……」

三試合目。一夏との試合。お互い一次移行が終了している。

「行くぜ。一春」
「ああ」

一夏は雪片弐型を、俺はデスシザースを構える。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に俺と一夏は動いた。

「ぜあああっ！！！」
「……」

振り下ろされる雪片弐型を弾き、連続攻撃を繰り出す。

「くっ！」
「その程度か？」
「まだだ！」

雪片弐型の中心の溝から外側に展開したそれは、一回り大きいエネルギー状の刃を形成していた。

「零落白夜……」

白式とタナトスの単一仕様能力。エネルギー系をすべて斬り裂く

能力で、世界最高峰の攻撃を持っている。

――俺に変われ。

――なに？

――いいから、さっさと変われ。

「おおおっ！！」

力任せに俺を押し、俺は地面に叩き落された。

「あはぎゃはっ！いいね、いいね。おもしれぇじゃねえかよ！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で間合いを詰めて、デスシザースで斬りかかる。それを一夏は雪片弐型で受け止める。

「くっ！」

「こんなもんか？ああん？」

「くっそ……」

「おらよ！」

一夏を押し飛ばし、地面に叩き落しデスシザースを収納して魔拳銃を展開する。

「魂の共鳴！」

――《死刑執行モード》――

オルコットとの試合の時と同じくタナトスから青い稲妻が走り、二丁拳銃が変形する。

「デスキャノン。逝っちまいな！！」
「くそっ」
ビームが放たれると同時に一夏は避けるが、かすれた。
「ちっ。避けたか。……だがなぁ」
一夏の回避先に回りこむ。
「動きが見えるんだよ」
再充填されたデスキャノンを撃ち今度は直撃した。
『試合終了。勝者――織斑一春』

「……」
「……」
試合が終わり、Bピットに戻りタナトスを解除し、戻ろうとしたところに姉と鉢合わせになった。
「お前……一春ではないな」
「ああ、そうだ。俺の名は織斑春一。もう一人の人格だ」
「お前はいつから居た？」
「あの事件の日からだ。じゃあな織斑千冬」

と春一が言った瞬間、目の紋章が消え一春の人格に戻った。

「……」

「もう用はない。帰って休め」

「ああ」

と言って俺は亜紀と合流して寮に戻った。疲れたせいか、案外速く眠れた。

4話（後書き）

アンケートの結果を発表します。

1．5票

2．3票

により、一夏ハーレムから二人ほど入れるに決定しました。これからもよろしくお願いします。

5話

翌日……。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいいですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。そんななか一夏は絶望していた。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは、織斑一春くんが辞退したからです」

俺がやるとでも思ったのか？

「だったら、勝利数が次に多いセシリアがクラス代表じゃ？」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。好きだよな、そのポーズ。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

俺に負けたくせによく言う。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして“一夏さん”にクラス代表を譲る事にしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

その後、一夏の教官ああだこうだで箒とオルコットが口論していたが、姉によって鎮圧された。やはりこの学園は馬鹿しかいないようだ。少しはましな奴がいると助かる。

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部がなくなった頃。俺は今日もこうして姉の授業を真面目に受けていた。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑兄弟、オルコット。試しに飛んでみせろ」

俺とオルコットはすぐに展開した。約〇・七秒の展開時間にクロークを展開した状態でアーマーを形成された。

だが、一夏は一向に展開されない。

ＩＳは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。オルコットは左耳のイヤーカフス。俺タナトスは右腕の黒のチェーン、ノワールは黒い羽のピアス。一夏は右腕のガンレット。タナトスと白式は兄弟機と聞いているが、待機状態が違う。まぁ、ガンレットよりはましだ。

「よし、飛べ」

言われて、オルコットと同時に急上昇し、上空で静止した。

一夏も遅れて後に続くが、俺とオルコットよりかなり遅いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズより上、タナトスと同等だぞ」

通信回線から早速おしかりの言葉を受けたようだ。ちなみに急上昇、急降下は昨日習ったばかりだ。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに微笑むオルコット。その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に単純に楽しいという笑顔だった。

「一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！」

いきなり通信回線に箒の怒鳴り声が響き、下を見ると箒が山田先生のインカムを奪っていた。後ろで山田先生がおたおたしていた。

「織斑兄弟、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標

は地表から十センチだ」
「了解です。ではお先に」
言って、すぐさまオルコットは地上に向かう。ぐんぐんと小さくなっていく姿を、眺めた。
「うまいもんだなぁ」
完全停止も難なくクリアーしたようだ。
「次は俺が行く」
「おう」
意識を集中。一気に急降下する。止まるタイミングは――ここだ。
「十三センチ……もう少し止まるタイミングをずらせ」
「はい」
続いて一夏……
「一春。逃げろ！」
一夏の声が聞こえた方を見ると、一夏がこっちに突っ込んできた。
ギュンッ――――――――ズドォォンッ！！！
結果。俺は避けられなかった。
「馬鹿者。誰が織斑弟に激突しろと言った。グランドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

シールドバリアーとブラックアウト防御のおかげで、俺とタナトスは無傷で気絶しなかった。

「さっさと退け」
「ああ、すまん」

一夏は姿勢制御をして上昇、地面から離れた。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて」
「一春、大丈夫？」

俺と一夏の前に現れたのは、亜紀とオルコットだった。

「大丈夫だ。問題ない」
「よかった」

俺の隣では、オルコットと箒がまたやっていた。

「織斑兄、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」
「は、はあ」
「返事は『はい』だ」
「よし。でははじめろ」

言われて、一夏は横を向き正面に人がいないことを確認してから、再度突き出した右腕を左手で握る。
手のひらから光が放出され、そしてそれが像を結び、形として成立する。

光が完全に収まった頃には、一夏の手には《雪片弐型》が握られていた。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

「織斑弟、武装を展開しろ」

「はい」

言われて俺は右手を正面に突き出し、一瞬だけ光りその手にはデスシザースが握られていた。

「まぁ、いいだろ。次、オルコット」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏とは違い、一瞬爆発的に光っただけでその手には狙撃銃《スターライトｍｋ？》が握られていた。

俺や一夏より圧倒的に速い。しかも、銃器にはすでにマガジンが接続されていて、オルコットが視線を送るだけでセーフティーが外れる。一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だだ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

反論の余地は大いにあるような顔をしていたが、そこは姉、一睨みで話が終わる。

「オルコット、近接用の武器を展開しろ。織斑弟は射撃用の武器を展開しろ」
「え？あ、はい」
「了解」

スターライトｍｋ３を光りの粒子に変換、そして新たに近接用の武装を展開するが、手の中の光はくるくると空中をさまよっている。

「くっ……」
「まだか？」
「す、すぐです。――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

武装の名前を半ばヤケクソ気味に呼び、武器として構成された。しかし、この展開方法は教科書の頭の方に書かれている、いわゆる『初心者用』である。俺はすでに魔拳銃を展開している。

「……何秒かかっているんだお前は？　実戦では良い的だぞ」
「じ、実戦では相手を近距離の間合いに入らせないので、問題ありませんわ！」
「ほう。織斑兄弟との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」
「あ、あれは、その……」

何やらごにょごにょ言っているが、姉の言うことが正論のため何も言い返せない。
その原因の一つである一夏はと言うと、少しだけ申し訳なさそうな顔をしていた。
「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑兄、グランドを片付けておけよ」

それを聞いた瞬間俺は即座に更衣室に行った。

◆

「ふうん、ここがそうなんだ……」

ＩＳ学園ゲート前。小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくない大きなボストンバックを肩から提げて立っていた。　左右それぞれに高い位置で結んでいる髪を夜風に揺らせながら、少女はくしゃくしゃの紙を上着のポケットから取りだす。

「本校舎一階総合事務受付……どこにあんのよ？」

ぶつくさ言いながら、取り敢ず少女は足を動かす。
ここで悶々悩んでいるよりも自分で探した方が速いと判断したのだ。
結果、

「もっと迷っちゃった……」

宛てもなく歩き回っている内に本気で迷子になってしまった少女。
キョロキョロと周囲を見回してみるが、一度も来たことがない場所なので目印など見つからない。

「はぁ……。ま、いっか。こんだけ奥に来れば誰か一人くらい通り

過ぎるでしょ。その時案内してもらお」
少女はボストンバックを床の上に置き、その上にちょこんと腰を下ろした。

――元気かな、アイツら。

ふと、そんな考えが胸中を過ぎった。
あいつらとは、世界初の男性ＩＳ操縦者として全世界に報道された黒髪の青年二人のことである。
数十分後に総合事務受付は見つかった。

「ええと、これで手続きは全て終了です。ＩＳ学園へようこそ、鳳鈴音（ファン・リンイン）さん」

少女、鈴音は受付嬢の笑みを無視し、受付に身を乗り出すように身体を乗せた。
「あの、織斑一夏と織斑一春って何組ですか？」
「あぁ、あの噂の子？一組ね。鳳さんは二組だからお隣さんね。そう言えば、兄の方は一組のクラス代表になったらしいわね」

そんな噂に興味はない、とでも言いたげな表情で鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まってるんですか？」
「決まってるけど……聞いてどうするつもり？」

受付嬢の問いかけに鈴音は薄い笑みを浮かべた。
その額にしっかりと血管を浮かび上がらせて。

「お願いしようと思って。代表を譲ってって……」

◆

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「おめでと～！」

ぱん、ぱんはーん。とクラッカーが乱射される。
今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員そろっていた。各自飲み物を片手にやいのやいのと盛り上がっているのだが……

「……」

ここに盛り上がってない少年がいた。
壁にはデカデカと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙がかけてあった。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」
「ほんとほんと」
「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」
「ほんとほんと」

おかしい。明らか三十人以上いる。

「はい、ケーキ」
「ん？ああ、ありがとう」

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と織斑一春君に特別インタビューをしに来ました～！」

オーと一同盛り上がるが俺は気にせずにケーキを食べる。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

受け取って、名前を見たがかなり画数多い。面倒ではないのだろうか？

「ではではずばり織斑一夏君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

ずいぶん前時代的な台詞だ。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

いや、あんたが言える立場じゃないだろ。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

いいか。捏造して。

「んじゃ、次織斑一春君！何か一言、どうぞ！って、一春君いないし」

「あれ？本当だ」
「裏切ったな一春。俺を裏切ったなあああああぁぁぁぁぁっ！！！」
ああ、何も聞こえない聞かない。俺はこういうのは嫌いだ。俺は部屋に戻った。
「確かケーキが一つ残ってたな」
昨日作ったケーキがまだ残っていたはずだ。冷蔵庫を開けて、中を見る。
「……」
中には、ケーキが置いていた皿の上に『ごちそうさまｂｙ亜紀』と書かれた紙があった。
「チッ……」
舌打ちをした後、即行で皿を洗いシャワーを浴びて眠った。

6話

「織斑くん、一春くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

転校生？この時期にか……。ちなみに全員に名字ではなく名前で呼ばせている。織斑と言われるのが嫌いだからだ。

「転校生？今の時期にか？」

たしかＩＳ学園は、試験はもちろん、国の推薦がないとできないらし。となると代表候補生か。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

（そういえば来月にクラス対抗戦があったな）

クラス対抗戦とは本格的なＩＳの学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためらしい。

ちなみに、一位クラスには優勝賞品が出るらしい。

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いよ」

声が聞こえたところ見ると一人の少女がいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

少女は腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた。

「鈴……？お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰　鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

何格好付けているのか理解できない。
バシンッ！

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません……」

そして鈴は教室に戻った。
そのあと姉の出席簿が火を噴いたのは別の話し。と言うより興味がない。

「連絡事項がる。今回のクラス対抗戦はツーマンセルになった。織斑兄のパートナーを決める」

面倒なことになった。まあ、組み合わせでは、一夏は近接戦闘型だから中距離射撃型のオルコットと組むとバランスがいいな。

「な、ならばこのわたくしセシリア・オルコットが「はーい、一春くんを推薦します」なんでですの！？」
「だってねー」
「セシリアより一春くんのほうが」
「強いもんねー」

それを聞いたオルコットは最初は怒ったが、クラスメイトが言っ

たことは正論だったため大人しく席に座った。

「では、織斑兄のパートナーは織斑弟。異存はないな」

はーいと（俺、一夏、箒、オルコットを除く）クラス全員一丸となって返事をした。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、開口一番箒とオルコットが一夏に文句を言ってきた。

「なんでだよ……」

この二人、午前中だけで山田先生に五回注意、姉に三回叩かれている。馬鹿だとしか言いようがない。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

そのほかクラスメイトが数名付いてきて、一夏たちはぞろぞろと学食に移動した。

「待ってたわよ、一夏！一春！」

どーん、と俺たちの立ちふさがったのは噂の転校生、凰鈴音だった。

「邪魔だ。どけ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

ちなみにその手にはお盆を持って、ラーメンが鎮座している。

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！大体、一夏と一春、アンタ達を待ってたんでしょうが！なんで早く来ないのよ！」

こいつがうるさいのは昔からだし、とりあえず俺は食券をおばちゃんに渡す。

「なんでこっちに来る」

「いいだろ別に。それにしても久しぶりだな鈴。ちょうど一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

よくない。まったくもってよくない。他にも席が空いているのになぜこっちに来る。

「げ、元気にしてたわよ。一夏と一春こそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

そんな二人の話を聞き流しながら、昼食を食べる。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。アンタ達こそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

そういえば一夏は一年ぶりとか言ってたな。俺は見送りに行ってないがな。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

箒とオルコットが多少刺のある声で訊いてくる。他のクラスメイトと亜紀も、興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……」

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

相変わらず馬鹿だ。一夏は。

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声で聞き返したのは箒だった。

「箒が引っ越したのは小四の終わりで、鈴転校してきたのは小五の頭だから、入れ違いだ」

と一夏が説明している間俺は昼食を食べ終わり、学食を出て行った。

「聞いてんの？」
「聞いている」

夜。寮の部屋で鈴の愚痴を聞いている。話によると、一夏が約束を覚えてないらしい。鈴は「料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べてくれる」で、一夏は「料理の腕が上がったら毎日酢豚をおごってくれる」という勘違いをしているらしい。

「それで、お前はどうするんだ？」
「決まってんじゃない。あいつが謝るまで許さない」
「そうか。なら、好きにやれ。自分の感情で」
「うん」
「それと、クラス対抗戦であいつを叩きのめせ」
「でもあれって、ツーマンセルに変わったんじゃ」
「一春は、織斑くんのパートナーなの」
「そうなの？」
「ああ」

対抗戦で叩きのめせば、鈴の気分もはれるだろう。

「だから、俺は邪魔はしない」
「ありがとう！一春。おやすみ」

そういって鈴は立ち去った。相変わらずやかましいヤツだ。俺は

鈴が立ち去ったあと眠りに就いた。

――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は、『クラス対抗戦日程表』。

一回戦の相手は――鈴だった。

7話

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と一夏と鈴と二組の誰か。
噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。

『それでは両チーム、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに従い、俺と一夏と鈴と二組の誰かは空中で向かい合う。

『それでは両チーム、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切られる瞬間に全員が動いた。
俺は二組の誰かの頭をつかみ、鈴たちから離れた。

「叩きのめしてやれ」
『うん。ありがとう』
「礼にはおよばん」

プライベート・チャンネルで言葉を交わしたあと、俺は敵に目をやる。
相手はデュノア社製の『ラファール・リヴァイヴ』でスペックは初期第三世代にも劣らないほどの機体だ。そして相手はアサルトライフルを構える。

「……」

俺は無言でデスシザース展開する。

「……行くぞ……」

「！？」

瞬時加速で間合いを詰め、デスシザースでアサルトライフルを破壊した。

「遅い」

右手に魔拳銃を展開して撃つ。相手はそれを避けながら、ショットガンを展開する。

「ぜれあああ！！」

俺はそれを避けながら、接近する。

ドンッ！！

「ぐあっ！」

刃相手に触れる寸前に、俺は何かに殴られ、俺は地表に打ち付けられる。

「なんだ……あれは……」

リヴァイヴにそんな装備はないはずだ。あるとしたら――

「鈴か……」

確か、甲龍（シェンロン）は中国の第三世代型兵器を積んでいたな。

「そろそろ、終わらせるか……」

向こうもそろそろ決着が着きそうだ。俺はデスシザースを収納して、魔拳銃二丁を展開する。

「魂の共鳴！」

――《死刑執行モード》――

タナトスから青い稲妻が走り、二丁拳銃が変化する。

「……」

「！？」

瞬時加速で、相手の五メートル後ろに移動した。相手も反応したようだが、もう遅い。

「デスキャノン」

ズドオオオンッ！！！

引き金を引く瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。ステージ中央からはもくもくと煙が二箇所上がっている。どうやらさっきのは『それら』がアリーナの遮断シールドを突き破って入った衝撃波のようだ。

『一夏、一春、澪、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

何を言い出すのか。そう思った瞬間、ハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

――ステージ中央に熱源二つ。所属不明のＩＳ断定。ロックされています――

「チッ――」

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られている。それろ突き破れるだけの攻撃力を持った敵が乱入、こちらをロックしている。

つまり、危険だ。

『みんな、早く』

「！来るぞ！」

間一髪、一夏は鈴の体を抱きかかえてさらい、俺はリヴァイヴのパイロットを突き飛ばし、突き飛ばした逆方向に回避した。

「ビーム兵器……。しかも出力はブルー・ティアーズよりも上……」

そして再度、煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる。

それをかわすと、二機のＩＳが姿を現した。

「なんなんだ、こいつ……」

姿から異型だった。灰色をしたそのＩＳは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首がない。肩と頭が一体化してしまっているような形をしている。

「貴様、何者だ。所属と名前を言え」

「……」

当然――といえば当然か。乱入者はこちらの呼びかけに答えない。
『みなさん！今すぐにアリーナから脱出してください！今すぐ先生たちがＩＳで制圧に行きます』
割り込んできたのは山田先生だった。心なしか、いつもより威厳がある。
「――いや、教師部隊が来るまで俺たちが相手をします」
あのＩＳは一撃で遮断シールドを突き破った。ということは今ここで誰かが相手をしないと観客に被害が及ぶ可能性があるということだ。
「お前ら、いけるな」
「おう！」
「誰に言ってんのよ」
『だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら――』
言葉はそこまでしか聞けなかった。敵ＩＳが体を傾けて突進、それを避ける。
「ふん、向こうはやる気満々みたいね」
「みたいだな」
「織斑と凰は右のをやれ。俺は左のをやる。リヴァイヴのパイロット。お前は非難していろ」
「「「了解」」」
そう言って、一夏と鈴は右のＩＳに、リヴァイヴのパイロットは

非難して、俺は左のＩＳに向かった。

（こいつの格闘スキルは未知数。ここは様子見か）

俺はもとの形状の二丁魔拳銃を構えて撃つ。隙ができたら、デスシザースで斬りかかるがスラスターの出力が異常なため、簡単に避けられてしまう。向こうも同じで、敵ＩＳのスラスターに苦戦している。向こうはもう五回目のトライのようだ。

「魂の共鳴！」

――《死刑執行モード》――

タナトスから青い稲妻が走り、二丁拳銃が変化する。

「零落白夜――発動」

銃口に新たに零落白夜のエネルギーが追加される。

「ターゲット、ロックオン。消えろ」

引き金を引き三十八口径の銃口から、ビームが放たれると同時に敵ＩＳは両手を最大出力形態に変形させて撃った。威力はおそらく向こうが高い。だが、俺は撃ったビームは零落白夜の能力を持ったビーム。つまり、相手のビームを打ち消す。

敵ＩＳのビームと俺のビームが中央でぶつかり合い、敵ＩＳのビームを打ち消していき、敵に直撃して破壊した。

「一夏ぁっ！」

キーン……とハウリングが尾を引くその声は、箒のものだった。

「あいつ……なにをしている」

中継室の方を見ると、審判とナレータがのびていた。おそらくドアを開けたところにバシンと一撃を食らったのだろう。

「男なら……男なら、そのぐらいの敵に勝てなくてなんとする！」

大声。またキーンとハウリングが起こる。

「……」

敵ＩＳは今の館内放送、その発信者に興味を持ったらしく、ずっと箒を見ている。

「チッ……」

視線の先には、敵ＩＳがその砲口を箒に向けていた。

「間にあえ！」

デスシザースを展開して、零落白夜を発動する。

「――オオオッ！」　一夏は、零落白夜を発動して、右腕を切り落とし俺は両足を切り落とした後、ブルー・ティアーズ四機同時射撃が敵ＩＳを撃ち抜き、機能を停止させた。

「ふう。何にしてもこれで終わ――」

――敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！――

「！？」

残った左腕。それを、さらに最大出力形態（バースト・モード）に変形させたＩＳが地上から俺を狙っていた。

次の瞬間、迫り来るビーム。俺は、一夏を突き飛ばし雪片弐型を展開してためらいもなく光の中へと飛び込む。

真っ白な視界の中、刃が装甲を切り裂く手応えを感じた――。

「う……？」

全身の痛みに呼び起こされ、俺は目を覚ました。

周囲を見回すと、どうやら保健室らしい。

「気がついたか」

シャッとカーテンが引かれる。そこには姉がいた。

「全身に軽い打撲と胸骨に二本ほどひびがある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」

「はい……」

まだぼーっとする。なんとなく視線をやった窓の外はもうあかね

色に変わっていた。今は放課後のようだ。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

それだけ言い残すと、姉はすたすたと保健室を出て行った。

「一春、起きてるか？」

「何のようだ？」

姉と入れ替わって入ってきたのは、一夏だった。

「なんであの時俺を庇ったんだ？」

「庇った？何をとぼけたことを言っている。お前を助ける気などない。あの時たまたまお前が邪魔だったからだ」

俺はベットから降りるが、怪我の痛みで顔をしかめる。

「お前、やっぱり怪我が……」

「お前には関係ないだろ」

「けど！」

「お前には関係ないって言ってんだろが！」

といって俺は一夏を突き飛ばして、部屋に戻った。

◇

学園の地下五メートル。そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。
機能停止したＩＳはすぐさまそこえと運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「……」

室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウインドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が移っていた。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶はいつもよりも幾分きびきびとした動作で入室した。

「あのＩＳの解析結果がでました」
「ああ。どうだった？」
「はい。あれは――無人機です」

世界中で開発が進むＩＳの、そのまだ完成していない技術。遠隔（リモート・コントロールスタンド・アローン）操作と独立稼動。そのどちらか、あるいは両方の技術があの謎のＩＳに使われている。その事情は、すぐさま学園関係者全員に緘口令が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたのかは不明です。一春くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切られていました。修復も、おそらく無理かと」
「コアはどうだった？」
「……それが、登録されていないコアでした。おそらくもう一機も同じかと」
「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」
「いや、ない。今はまだ――な」

そう言って千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。
かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめつつ続けた。

◇

部屋に戻り、すぐに夕食を食べに学食に行った。学食に行くと、今日のトーナメントのことを聞かれたが適当に流した。そして現在は部屋に居る。

「そういえば、ケガどうなの？」
「全身に軽い打撲と、胸骨二本ひびが入ってるらしい」
「それって……大丈夫なの？」
「大丈夫だろ」

コンコン。

「あのーシューエルさんと織斑くん、いますかー？」

このとぼけた声は山田先生だ。がちゃりとドアを開けて本人が入ってくる。

「どうかしましたか、先生」
「あ、はい。お引っ越しです」
「誰が？」
「シューエルさんです。部屋の調整が付いたので、今日から同居しなくてすみますよ」

なるほど、山田先生もなかなかやる。

「それじゃあ私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう」
「ま、ま、待ってください。今すぐじゃダメですか？」
「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活するというのは問題はありますし、シューエルさんもくつろげないでしょう？」
「い、いえ、私は――」

まごついた言葉を返しながら、亜紀はちらっとこっちを見る。――ああ、そういうことか。

「気を遣うな。俺のことは心配するな。亜紀がいなくてもちゃんと起きるし歯も磨く」
「一春の……」
「？」
なんなんだ？この嫌な予感は。
「一春のバカあああぁぁぁ！！！」
どげしっ！！！
「ぐはぁっ！」
いきなりの正拳。しかも、殴ったのはみぞおち。それと胸骨にひびが入ってるせいで、さらに痛みを増す。そして俺は意識を失った。

8話

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」
「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じじゃない？」
「そのデザインがいいの！」
「私は性能的にみてミューレイのがいいかなぁ。特にスムーモデル」
「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子がわいわいと賑やかに談笑をしていた。みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見交換している。

「そういえば織斑君と一春君のＩＳスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」
「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリット社のストレートアームモデルって聞いてる」
「諸君、おはよう」
「「「お、おはようございます！」」」

それまでざわざわとしていた教室が一瞬で静かになった。一組担任の姉と山田真耶先生の登場だ。

「今日から本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろ」

いや構うだろ！と、俺と一夏以外もこのクラスの女子は心の中だ突っ込んだはずだ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた姉が山田先生にバトンタッチする。ちょうど眼鏡を拭いていたらしく、慌ててかけ直す姿がわたわたとしている子犬のようだった。

「ええとですね。今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「え……」

「「「「「えええええっ！？」」」」」

いきなりの転校生紹介にクラス中がいっきにざわつく。

（なぜ分散しない？普通はそうするはずだが）

そんなことを考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわつきがぴたりと止まる。

なぜなら、そのうちの一人が――男子だからだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。
「お、男……？」
誰かがつぶやいた。
「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」
「きゃ……」
「はい？」
「「「「きゃあああああーーーー」」」」
突如、黄色い声が教室に響いた。
「男子！三人目の男子！」
「しかもうちのクラス！」
「美形！守ってあげたくなる系の！」
「地球に生まれて良かった～～～～！」
やかましい……。
「あー、騒ぐな。静かにしろ」
面倒くさそうに姉がぼやく。
「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」
続いて二人目の転校生なのだが……

「……」

口を開かず、腕組みをした状態で下らなそうに見ていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

素直に返事をし、姉に敬礼をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そしてラウラはぴっと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。

どうみても軍人だろと思わせる感じだった。

そして挨拶をした。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

クラスメイトたちの沈黙。

そして自己紹介をした後口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは

無慈悲な即答になきそうになった。

「！貴様らが――」

ボーデヴィッヒと目があい、こっちに来た。

バシンッ！

一夏を殴り、俺の前に立つ。

バシッ！

「……」

「……」

目の前に立ち、右手を振りかぶり平手打ちをくらわせようとするが、俺は右腕で受け止めた。

「私は認めない。貴様らがあの人の弟であるなど、認めるものか」

とだけ言って空いている席に座ると腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなった。

「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グランドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

そしてＨＲが終わった。

「おい織斑兄弟。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

やっぱりそうなるか。

「君たちが織斑君？初めまして。僕は――」
「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。一春ってもういねえし」
一夏が気づいた時には俺はもう更衣室に行っていた。悪いな。俺はまだ死にたくない。

「よーし、到着！」
ドアが斜めにスライドして開き、第二アリーナ更衣室に一夏とデュノアが入ってきた。
「遅れるぞ」
「うわ！時間ヤバ！」
一夏とシャルルが着替えはじめるのと同時に、俺は更衣室を出た。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
「「「「はい！」」」」

一組と二組の合同実習なので、返事が妙に気合いが入っていた。
「くうっ……。何かというとすぐにぽんぽんと人の頭を……」
「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」
叩かれた場所が痛むのか、二人はちょっと涙目になりながら頭を押さえていた。
「そして今日は戦闘を実演してもらう。　すぐに始められる専用機持ちで誰か――」
「はい、教官。　私がやります」
姉の言葉に反応したのはボーデヴィッヒだった。
「教官は止めろと言っている…では、相手は――」
「織斑一春。貴様が相手をしろ」
「いいだろう」
前に出て、向き合いＩＳを展開する。
「こい、落ちこぼれ」
「調子に乗るんじゃねえぞ。女ァ！」
デスシザースを展開して、接近する。
ガギィンッ！
ボーデヴィッヒのプラズマ手刀とデスシザースの刃が、ぶつかり合う。

「チッ！」

右肩のレールカノンを撃つと同時に、斜め後ろへ回避して二丁魔拳銃を展開する。

「魂の共鳴！」

――《死刑執行モード》――

タナトスから青い稲妻が走り、二丁拳銃が変化する。

「チッ……！」

危険を感じたのか、ワイヤーブレードを飛ばしレールカノンを撃つ。

「デスキャノン」

引き金を引き三十八口径の銃口から、ビームが放たれる。

ワイヤーブレードのブレードが破壊され、レールカノンの弾とぶつかる。

「ぜらあああっ！」

デスシザースを展開して、ボーデヴィッヒに接近する。

ボーデヴィッヒは再びレールカノンを撃つ。

レールカノンの弾を斬ろうとした瞬間、突然デスシザースが結晶に包まれ、結晶が砕けると刃が三日月になり、弾丸を斬り裂いた。

それを見てボーデヴィッヒは驚いている。正直俺も驚いている。

Ｓａｌｖａｔｏｒ　Ｓｙｓｔｅｍを使ってないのに、Ｓａｌｖａｔｏｒ　Ｓｙｓｔｅｍと同じ現象がおきたのだからだ。

「そこまでッ！」

姉の合図が聞こえ、手を止めてアリーナの地面に降りる。
その後で聞こえてくるのは拍手の音である。　見てみると山田先生まで拍手していた。

「以上が戦闘の実演だ。最初からあそこまでやれとは言わんが、あの程度は確実に出来るようになってもらう。では班を分ける。専用機持ちは織斑兄弟、オルコット、デュノア、鳳、ボーデヴィッヒそれとシューエルお前も代表候補生だったな。八人グループで実習を行う。　グループのリーダーは専用機持ちとシューエルがやる事。では分かれろ」

姉が言い終わった瞬間、俺と一夏とシャルルに一気に二クラス分の女子が詰め寄ってきた。

「織斑君、一緒にがんばろう！」
「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」
「一春君、いろいろ教えて」

……予想通りいや、それ以上の状況で、一夏もシャルルもどうしていいのかわからずただ立ちつくすだけで、俺は無視した。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグランド百周させるからな！」

姉に言われ、グループは案外速く出来た。
「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」
姉にばれないようにしながら、各班の女子はぼそぼそとしゃべっていた。こいつら死にたいのだろうか？
ちなみに唯一おしゃべりがないのがラウラの班だった。
そして、実習が始まった。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」
「あー……。あんなに重いとは……」
訓練機は専用のカートで運ぶのだが、動力がついていなく、俺と一夏は一人で運び、デュノアの班は数人の体育系女子が運んだ。
「まあ、いいや。一春、シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」
「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行って着替えてよ。時間かかるかもしれないから、待ってなくていいからね」
「？わかった。先に戻る」

俺は一夏の首根っこを掴み引きずって、更衣室へと向かった。

9話

――模擬戦の時のあれは、お前の仕業か？
――ちげーよ。
――では、あれはなんだ？
――知るかよ。タナトスが俺たちの知らない力を手に入れたとしか言いようがねえ。
――そうか。

俺の知らない力か。あの時の感覚で戦えばまたあれが使えるのか？

「一春、昼飯食いに行こうぜ」

俺に声をかけたのは俺の兄、織斑一夏だった。こいつ最近俺に関わるなって言ったのに。

「……」
「おい、無視するな！」

と言って俺の肩に触れる。

「俺に触れるな」

一夏の手を叩いた。

「デュノアを誘えばいいだろ。俺に関わるな」

と言って一夏の前から立ち去った。

◇

「……どういうことだ」
「ん？」

昼休み、俺たちは屋上にいた。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」
「そうではなくてだな……！」

横に視線をやると。そこにはセシリア、鈴、そしてシャルルがいた。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばっかりで右も左もわからないだろうし」
「そ、それはそうだが……」

手には包みにくるんだ手作りの弁当が握られていた。

「はい一夏。アンタの分」

そう言ってタッパーを放る鈴。

「おお、酢豚だ！」
「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

タッパーの中は酢豚オンリー。ちなみに鈴は自分の分のご飯だけ買ってきていた。

「コホンコホン。――一夏さん、わたくしもたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

バスケットを開くセシリア。そこにはサンドイッチがきれいに並んでいる。

「お、おう。あとでもらうよ」

「？どうかしまして？」

「いや！どうもしてない！」

セシリアの料理は、見た目はきれいなのだか、味がすさまじくまずい。

なぜなら、自分の知らない調味料を適当にいれているからだ。

「はっきり言わないからずるずるいっちゃうのよ。バーカ」

ちなみに、鈴は昔一夏に料理を作ったとき、「おいしいって言わないと殺す」と顔に書いていたらしい。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

俺の隣シャルルがそんなことを言う。

「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。わからないことがあったらなんでも聞いてくれ。――ＩＳ以外で」

「アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」
「してるって。多すぎるんだよ、覚えることが。お前らは入学前から予習してるからわかるだけだろ」
「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習をはじめますわね」

今のところ模擬戦でのトータル勝率も1位が鈴2位がセシリア、3位が箒、4位が俺。情けない結果である。一春は参加していない。一人で自主練をしている。
その後も、喋りながら昼食を食べた。

◇

「お前が俺と同室か」
「うん。よろしく。僕のことはシャルルでいいよ」
「わかった。俺のことも一春でいい」

夜、夕食を終え俺とシャルルは部屋に戻ってきた。

「シャワーの時間はどうする」
「あ、僕が後でいいよ。一春が先に使って」
「わかった。遠慮はするなよ」
「うん。ありがと」

それから、少し話して眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0976w/

ＩＳ－インフィニット・ストラトス－　ＩＦ　落ちこぼれの弟

2011年10月22日00時08分発行